

郷土館だより

Vol. 14. No.1

1991. 12. 20



小松宮別邸絵図

跡見花蹊筆

三島市制50周年記念の企画展「わがやの家宝」で展示した「小松宮別邸絵図」について、詳しくお知らせ致します。

明治23年、現在の楽寿園は、小松宮家によって庭園として造営され、以来同家の別邸となりました。富士溶岩の上に茂る自然森林と小浜池に湧き出す豊富な湧水の地は、東海の景勝地として広く知られるところとなりました。

小松宮家には、三島近隣の選ばれた女性たちがお仕えし上がっていたものだと聞きます。本品の元の所蔵者だった「おはまさん」(明治18年生)も、そうした女性の一人でした。宮様からいただいたものが、この絵だったのです。

絵は冬の風景です。真っ白な雪をいただいた富士と愛鷹山を背景に、やわらかな冬の陽ざしに包まれた庭園で遊ぶ鶴がいます。まん

まんと水を湛えた池の向こうには、主室の楽寿の間が木立ちの切れ目に垣間見えます。いかにも女性の筆らしい、やさしい絵だと言えます。

筆者は跡見花蹊(1840-1926)。明治・大正時代の女流女子教育家、跡見女学校の創設者です。名は滝野、花蹊と号しました。

天保11年(1840)4月9日、摂津国西成郡木津村(大阪市西成区)に生まれました。父重敬は私塾を経営していたが、当時の跡見家は衰運時代にあり、円山派の絵画や詩文に秀れていた花蹊は、父を助けながら自らの修業をつんだと言われます。

慶応2年(1866)、京都に私塾を開き、上流子女に絵画・詩文・書を教え、女流教育の地歩を築きました。東京移住後も塾教育を続け、明治8年(1875)神田中猿楽町(神田神保町)に校舎を設けて跡見女学校を開いています。

三島市郷土館企画展 「水と生活」から

■はじめに

かの松尾芭蕉は「三島は水の裏通り」と形容し、一首俳句を詠んでいます。この芭蕉の表現は実に適格でした。たしかに、かつて三島は水が本通りで、街や道は裏通りみたいなものでした。いつごろから三島が「水の街」と呼ばれるようになったかは判らないが、今でも三島の人々は水の街を自認し、「水の都」とさえ表現しています。つまり三島にはよい水と豊富な水があり、ここが人間が住まう上で最適な地であることを半ば自慢にしているのです。

ところが現状の三島は、水の都はおろか水の街とさえ小声で言わないと恥ずかしいくらい水が少ない所となってしまいました。こうなるとただの町です。しかし、それにもかかわらず、三島市民の水に対する関心は高く、むしろ、現在の水なし状態になってからの方が「水、みず、MIZU」と声高に口にするようになったように思えます。正直なところ、今、三島は意識の上での「水の都」なのです。

この夏、郷土館で開催（7月28日から9月16日）した企画展「水と生活」は、こうした市民の水渴望意識が土台となって企画実行されたものでした。この企画展「水と生活」についての報告をすることにします。

■三島は水の裏通り

三島が水の裏通りだったことを実証する「三島宿絵図解説図」を見ていただきます。史料は幕末頃の三島宿を描いたもので、本陣家文書の中の1点です。網かけの部分の水の道（川）、白い線が道です。圧倒的に網かけが目立ちます。これで判るように、三島は水路の網の目の上に道を通し橋を架け、街をつくってできた町です。

太く横に貫いている道が旧東海道ですが、その上の3か所の池は三島の二大湧水源の小浜池と白滝（菰池を含む）、そして三嶋大社の神池です。三島の川は全てこれらの池を源流

としています。その上、流れは上から下（つまり北から南）へ流れるばかりか、東海道に沿うようにも流れていました。この東西の流れは、むしろ住民が積極的に引き込んだ人工の用水堀でした。ともあれ、三島では川に沿って家を建て、川の水を引き込んで生活するという、いわばカワバタ民俗が発達しました。このカワバタについては後に触れます。

■三島人の水意識

「三尺下れば、真水になる」

これは、三島の湧水の流れに沿って家を建て、生活している住民の言うことです。住まいの脇を流れる川に、家庭廃水をはじめ不要になった種々の汚物を流しても、豊かな水の流れが全て持ち去ってってくれるので安心だ。例えば、隣の家でオムツを洗っていても、3尺（約1メートル）下流の家では、その流れで米をといても大丈夫だということです。

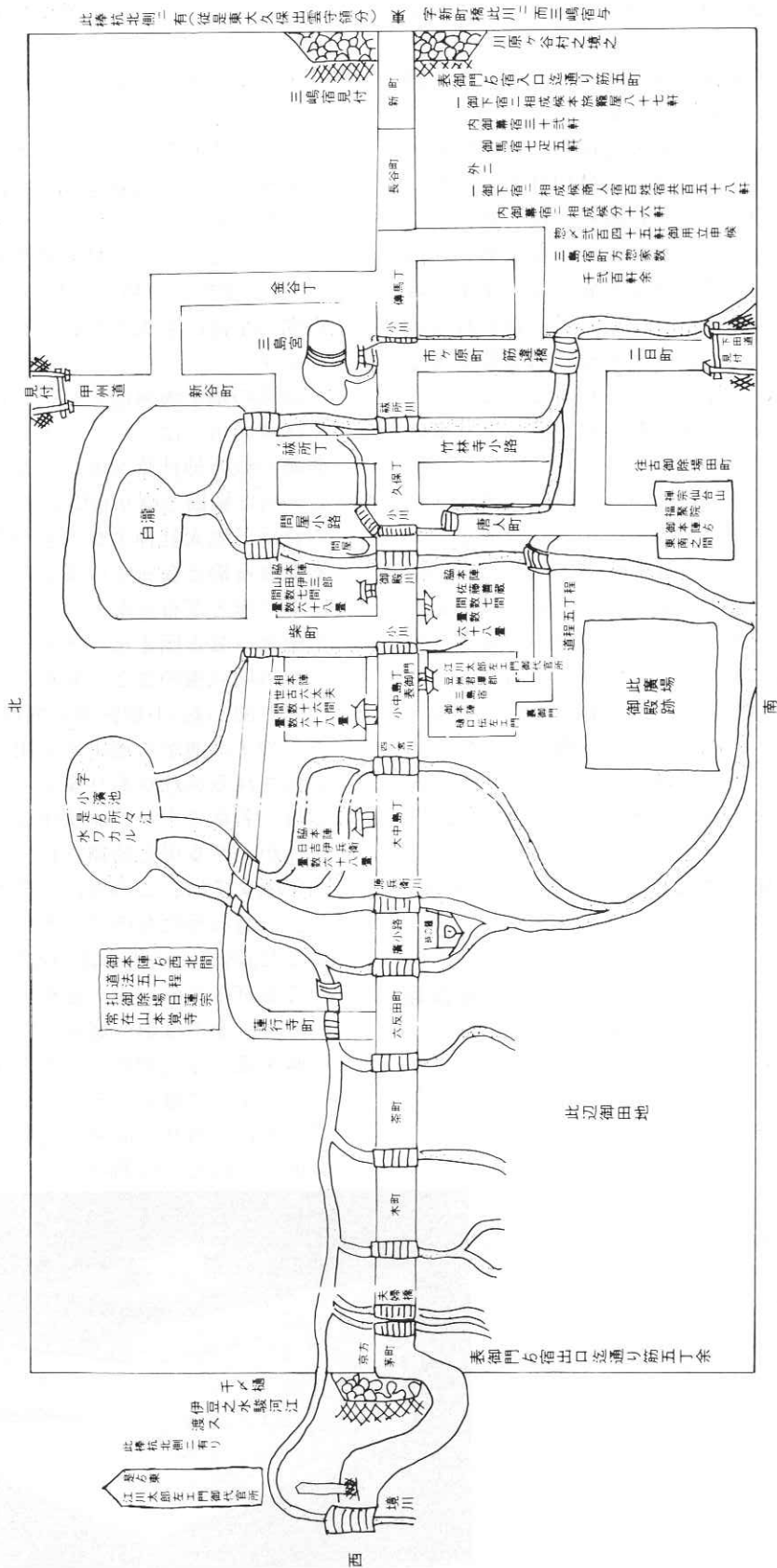
実際のところ、かつて、こうした事例は沿岸の各所で存在していました。また、それを語る伝承者は多くいます。このことは、とりもなおさず、三島の水（湧水河川）の流れが豊かだったことを物語っています。更に突っ込んで言及するならば、「水（の豊かさ）に対する甘えが意識の中にあった」と言えます。つまり、三島は水が豊富だった故に、人には水に対する安心感と甘えが同居していたのでした。

こうした甘えの意識とは反対に次のような川に対する禁忌伝承もあります。「川に小便するとオチンチンがひん曲がるぞ」です。現在中年以上の人なら、かつて親たちからこういわれた経験を持つ人は多いでしょう。前述のような反面で、川の水を大切にしようという意識もまた働いていたものです。

■三島の川が持つ意味

三島住民には前述してきたような矛盾した意識が同居していましたが、本来三島の川に

三島宿絵図解説図



は住民の意識を越えた意味や役割があったはずです。

旧三島宿の東側の境川となっていた川を神川(かんがわ・現在の大場川)と称します。この川はムラ境の川であると同時に神の渡る川でした。古く三嶋大社の境外摂社の一つだった祇園社(現在の賀茂川神社)は、神川の東北対岸に鎮座し、三島宿及び三嶋大社の鬼門除の神として素盞鳴男命を祀っています。現在大社の祇園祭として7月15日に行われている祭礼も、かつては7月8日に祇園社から三嶋大社舞殿に移遷してから行っていたものでした。祇園社の渡御は神川橋を渡って荘厳に行われていたといえます。

一方、宿の西外れを流れる川は文字通り境川と称されます。この川は伊豆と駿河を分かつ国境の川でした。旧東海道の「さかひ川橋」の架かる辺りは深い谷になっており、川中自体は狭いのですが、いかにも国境の趣きを有します。橋に平行して、伊豆の小浜(楽寿園内小浜池)の水を駿河(現在清水町の新宿・伏見・玉川・長沢・柿田・八幡)六ヶ村の水田に送る水樋(千貫樋)が架かっています。しかも、境川下流の地域には川に関する民俗事例が今も豊富に残っています。

三島市平田の渡辺波治目さん(大正6年生)宅はオキ(奥)のイエナ(屋号)を持つ境川脇の家です。川向こうの家は隣ムラの清水町に属する家で、声を掛ければ届く所に見えます。ところが橋がありません。したがって、近所付き合いもまったくないといえます。子供の頃は石投げ、悪口の言い合いなど、川を挟んでの喧嘩をしょっちゅうしたものだといえます。また、川漁が盛んでした。9月から11月にかけてはクダリガニ(下り蟹)をカニモジリでとっていました。業者が回ってきて買い取り、富士の方で売っていたそうです。ツノガラエビ(海老)はイザロ(ざる)で簡単にとれ、村のヒトヨセ(人寄せ)には寿司のタネにしたものだと

いいます。そのほかに鰻やうぐいも大量にとれました。川漁の道具にはブツタイやモジリを使っています。盆(8月17日)にはマコモを舟型にして、団子やナス・キュウリを供え、川に流しました。渡辺家のカワバタ(川端)は地区の人たちの盆送りの共同カワバタとして利用したものだそうです。

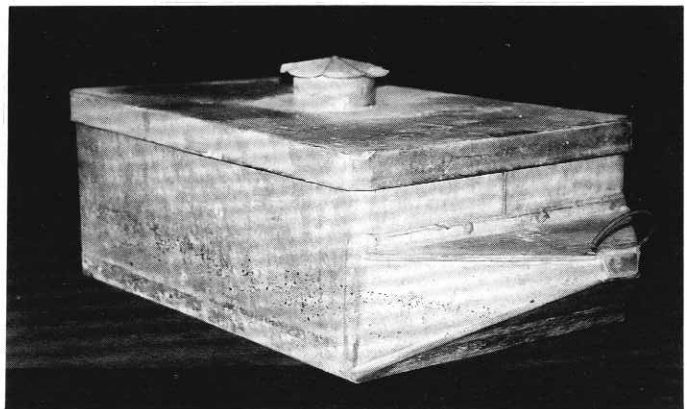
以上のように、三島の東西両境の川を持つ意味は、国やムラ境の役割のみにとどまらず、人間の生活にも大きな影響を及ぼしていたものです。

白滝の地を源泉池として流れる桜川は、古くは祓所川(はらいど)と称され、三嶋大社西側の祓所神社脇を流れる神聖な川でした。この川に殿橋という石橋が架かっていました。これは三嶋大社神主が二宮浅間神社に社参する際渡る橋となっていました。殿橋のたもとには「米とぎ石」があり、ここで大社の神饌米をといだと伝えられます。

明治期以後のことですが、小浜の地(現在の楽寿園)は、小松宮家の別邸となりました。この小浜池から流出する川で「宮さんの川」と称される流れがあります。宮家を源流とする故の名称ですが、流域住民には神聖で、犯すべからざる川と認識されていました。昭和30年頃までは、この川には豊かな清流があふれ、三島っ子たちのプール代わりとなっていました。宮さんの川で泳いだ経験を持つ人は、今でも宮さんの川の「恩恵」を語り草としています。そのほか、徳川三代将軍家光公の陣屋脇を流れる「御殿川」もあります。

このように見てくると、三島の川は本来神聖な流れであり、流域住民が共同的に、しかも節度を保ちつつ利用すべき川であったよう

▶
フネ



に思います。こうしたことが崩壊し、現況のような惨状に至ったのは歴史の変遷に因るものであり、それに伴って本来の川や水に対する意味と意識が忘れ去られてしまったということに結論されるでしょう。

次に三島の水信仰の衰退についても述べてみます。

■三島の水神

三島では旧市内だけで6か所（あるいは7か所）に水神が確認できました。いずれも水源地にあり、石ないし木造の祠を築いて祀られています。否、祀られていたと、過去形にすべきでしょう。三嶋大社境内にあって神社で管理している水神、間眠神社境内で氏子会長に管理されている水神の2社を除いては、現在「祠が何であるか」が近所の住民でさえわからない状況となっています。このような状況となった原因には、第1に湧水が枯渇したことがあげられます。「水が湧いていたところは祀っていたのだが」という嘆きを、ここここでポツン、ポツンと聞きます。やはり、「水の有難み」は、水がなくなって初めて身にしみるものなのでしょう。

三島市郊外では、山田川（大場川の支流）中流域の分水堰付近に水神があり、下流の川原ヶ谷地区の稲作農民によって祀られています。この川の水は箱根山中の「しぼり水」を源流とし、流量の減少は見られるものの枯渇状態ではありません。毎年4月、川ざらいの済んだ後に、川原ヶ谷の人々によって御神酒を供え、水神祭が施行されています。以上のように、かつて水が豊富だった旧市街地では、水が枯渇するや急速に水神信仰はすたれ、水のある所でのみ信仰が生きているのです。

一方、近代になって三島市と合併し、新しく三島市域となった箱根西麓地域では、昔から水不足に悩まされていました。この地域における雨乞い行事は、それを物語る民俗行事です。稲ワラ、麦カラを束ねて巨大な籠を作り、ムラ中を担いで練り歩き、最後は沢に放り投げるといふもので、これは近年までやっていました。箱根西麓5ヶ新田は畑作地域です。水の便が悪く、夏季の日照りにはかなり困ったことも多かったようです。

■「水と生活」—カワバタと民具—

とにかく、三島の住民と水とのかかわりには深いものがあります。それは、水の豊富であった昔にはなお更でした。現在も数多く残るカワバタは、三島の水と生活を象徴する施設と言えるでしょう。

カワバタには2種類の形が見られます。一つは、川岸に石段を設け、水面に張り出しの棧橋を架けたもの。もう一つは、川に面した屋敷の上流と下流に穴をあけ、溝を堀り、自宅の庭あるいは勝手場に水を回遊させたものです。いずれのカワバタも、米とぎの場所、野菜の洗い場、洗濯場、行水の場として利用されてきました。子供のころ「カワバタで風呂の水を汲んだ」という思い出話が多く聞かれます。

このカワバタで最もよく使われていた民具は、「フネ（舟）」と呼ばれるブリキ製の舟型冷蔵庫でした。フネの普及率は高く、ほとんど沿岸家庭の一家に1艘備わっていました。町のブリキ屋では、たいていの所でフネを作ることを商売としていたと聞きます。フネはカワバタの杭につなぎ止め、この中には魚、おかず、御飯の残りなどを乗せ、ふたをして川に浮かべておきました。1年間を通して水温の変わらない湧水の流れは、格好の天然冷蔵庫の役目を果たしていたのです。（写真）

■結び

以上、三島の事例だけを取り上げて「水と生活」について述べてきましたが、水と人間との民俗的な関わりは、基本的には日本中そう変わらないものと考えます。つまり、水を頼みとして生活を営み、その水を神聖な恵みと見る姿勢はどこでも同じです。また、この頼りとしてきた水が、日本各地で不足の危機に陥っている状況も一方にあります。「水の国」であったはずの日本においてさえ、であります。水問題は、一人三島の問題にとどまらないようにも思います。

今、あらためて、水と人とのかかわりを根本的に再考すべき時ではないかと、企画展終了後の感想を持ったしだいです。

（静岡県民俗学会報掲載）

平成2年度 三島市郷土館事業報告

市民の郷土意識高揚を図るため、常設展のほか、企画展の開催、および小・中学生、婦人、一般を対象とした各種講座を開催しました。主なものは次の通りです。

区分	事業名	事業内容	実施日	入館者及び参加者	備考	
展示	常設展示	故郷の自然と民俗（2階） 三島の歴史（3階）			2階、3階を常設展示場としている。コーナーごとに展示。	
	企画展示	企画展 富士を廻る俳人 「龍の本連水とその師匠展」	三島市佐野生まれで、幕末から明治にかけて活躍し、地方俳諧の頂点を極めた龍の本連水の俳句・俳画や、二人の師匠の作品を展示。	2月25日～5月6日 (69日間)	入館者総数 23,585人	資料提供者 勝俣 巖 氏、他
		企画展 「梅御殿装飾絵画展」	今まで公開されなかった楽寿園隣接「旧小松宮別邸梅御殿」の装飾絵画を展示。明治の絵画と、雅やかな皇室文化の一端の窺い。	5月20日～7月1日 (42日間)	入館者総数 10,765人	資料提供者 精明実氏、三島市教育委員会
		企画展 「古地図展」一浅倉コレクションを中心に	江戸から明治にかけての三島や伊豆地方・東海道・静岡県内の古地図を郷土史理解の一助として展示。	7月29日～9月24日 (57日間)	入館者総数 14,718人	資料提供者 浅倉 哲 氏、他
		企画展 「石と生活展」	古代から近世、近代までの生活と石とのかかわりを展示し、石の民俗、石の文化を発見、理解する。	11月23日～平成3年2月11日（73日間）	入館者総数 14,467人	資料提供者 沼津市文化財センター、他
		企画展「ふるさと的人物 コンデンスミルクの祖 「花島兵右衛門展」	明治の三島の教育や、産業に偉大な足跡を残した三島市生まれの花島兵右衛門の業績や作品、遺品を展示。地域史を学ぶ。	3月24日～5月26日	入館者総数 22,336人 (3月中3,245人)	資料提供者 花島 信之 氏、他
		特別展示 「伊豆七島写真展」	河辺武氏（故人）が50年前伊豆七島の風景や風俗を撮影した写真20点を展示。	7月1日～7月31日 (27日間)	入館者総数 5,373人(古地図展に 重複あり)	資料提供者 河辺 佐紀枝 氏
教育普及	縄文土器作り教室	土をねる、形を作る、焼成するという三段階の縄文土器作りを通して古代の生活に対する理解を深めた。	7月25日、27日、 8月23日	小学生（4～6年） 30人	指導：郷土館学芸員	
	夏休み郷土学習会 「三島の水めぐり」	小浜池を始めとする湧水源から河川や水路をたどり、人々が虫み水をどのように使ったか、など理解を深めた。	8月14日	小学生（4～6年） 13人	講師：林津 亘 氏	
	歴史講座	中世から近世までに伊豆を舞台として歴史を動かした人々について専門の先生による講演。企画展「石と生活展」の関連として伊豆を中心とした石の民俗について専門の先生による講演。	10月～1月の第一土曜日（4回）	一般市民 60人	講師：水間清氏、 長谷川福太郎氏、 仲田正之氏、木村博氏	
	ふるさと講座 「紡ぐ、染める、織る」 「ソバつくり」	昔の衣生活を体験する、「毛糸紡ぎ」「アカネ染め」「ハタオリ」の染め織り体験講座。昔の食生活を体験する、「ソバつくり」体験講座。	11月～12月の木曜日 (4回)	市内の女性 25人	講師：井上一雄氏、 勝又信子氏、勝又きん氏	
	おかざり作り講習会	藁をなうことから始め、しめ縄、正月玄関飾りを作る。	12月9日	一般市民 25人	講師：兼子 啓助 氏、他	
	郷土館夜間開放	ホテル祭りが楽寿園内で開かれ多くの親子が入館するこの機会をとらえ、郷土を知ってもらう良い機会を夜の夜間開放した。	6月16日～17日	約1,000人	夜6時～9時	
	初級・中級古文書講座 （自主グループ活動）	「伊豆日記」「駿河土産」の原文をテキストにして、毎月1回の学習会で講読。	毎月第三土曜日および 日曜日（年間12回）	会員数 初級29人 中級24人	講師：辻 真澄 氏	
	古文書読習会 （自主グループ活動）	種日本陣文書の解読に協力。	毎月第二、第四土曜日 （年間23回）	会員数 26人	講師：長谷川 福太郎 氏	

区分	事業名	事業内容	実施日	備考
収 集	郷土資料の収集	(1)市民からの連絡を受けて収集する日常活動における収集。 (2)企画展などを機会に収集する。	4月～3月	民具、古文書、参考資料など。
保 管	収蔵品の整理	(1)収集資料の整理、古帳の作製。 (2)録音資料、写真資料、文獻資料の整理。	4月～3月	アルバイト雇入れ、給食職員活用（夏休み）、 古文書読習会々員協力など。
	収蔵庫のくん蒸	3階収蔵庫のくん蒸。	7月4日～6日 (臨時体館)	くん蒸専門業者委託。
出版活動 (調査・研究活動)	郷土館だよりの発行	年間3回発行 郷土館広報及び調査研究報告など。	年間3回発行 12月、3月	無料（8ページ） 1,500部
	絵巻書「浮世絵三島」 (シリーズ2)の作製	広重などの描いた東海道五十三次の浮世絵の中から三島を描いたものを選んで作製。	12月	100円（4枚セット） 2,000部
	企画展にともなう出版	(1)「梅御殿装飾絵画展」パンフレット	5月	無料 2,000部
		(2)古地図展「一浅倉コレクションを中心に」パンフレット	7月	無料 2,000部
		(3)「石と生活展」一石の文化を発見— 図録	11月	有料（頒価1,000円） 500部
(4)ふるさと的人物 コンデンスミルクの祖「花島兵右衛門展」パンフレット	3月	無料 2,000部		
「三島宿本陣資料集(7)」 の発行	古文書読習会々員の解読協力により、種日本陣文書を解読して史料集として刊行。	3月	有料（頒価1,900円） 300部	
「広報みしま」郷土館シリーズ掲載	郷土の歴史や民俗について紹介。	毎月1回掲載	市内全世帯配布	

平成2年度 入館者数

学 生（小中高）	一 般（個人）	団 体（30人以上）	合 計
26,589 人	52,472 人	(163) 8,976 人	88,037 人

市制50周年記念／しずおか文化の祭典'91参加

企画展 「わがやの家宝」 報告

平成3年10月20日から11月24日までの期間で、企画展「わがやの家宝」を開催しました。当初の「集められるかどうか」という心配をよそに、「広報みしま」での募集に多くのみな様からの出品申し込みが相次ぎ、うれしい悲鳴をあげたものでした。

集まりました家宝は、彫刻・絵画・書・工芸品・記念の品や写真など、いずれもがそれぞれの家の歴史や地域の歴史に深い関係のあるもので、逸品ぞろいとなりました。総出品数は、48件で、個々の点数にすると100点を越えました。

この開催に時を合わせたように、楽寿園の小浜池にも水が湧き出し、今秋の人の賑わい

は例年のないものとなりました。

どの出品物にも、それぞれの解説を付して展示しましたが、ここでは、中でも興味深いと思われる資料を取り上げて、開催のご報告も兼ね、お知らせ致します。(下段の囲み)

末尾になりましたが、御協力下さいましたみなさまに、深く感謝申し上げます。

「わがやの家宝」展 入館者数

	10月 (20日～31日) 12日間 (人)	11月 (1日～24日) 24日間 (人)	合計 (人)
学生(小中高)	900	3,030	3,930
一般(個人)	2,110	7,420	9,530
団体(30人以上)	(7) 235	(17) 1,175	(24) 1,410
合計	3,245	11,625	14,870

紀元一千八百六十一年式

「歩兵練法」

宇幸蔵書

表題に上記のように記してあり、南本町の宇野家に伝えられる一冊の古文書(横帳・小)を展示しました。宇野世章氏によれば、「幕末の名代官江川太郎左衛門が農兵の訓練に使用した教練書」であるといえます。

中を開くと、第一ページ目に、生兵教練号令と題し、第一教、一套から四套に次のようにあります。

一套

- 「気をつけへ」
- 「一、頭を左、右」
- 「二、直レ」
- 「其まま休メ」

二套

- 「小隊右を＝向」
- 「左を＝向」
- 「小隊左を＝向」
- 「右を＝向」
- 「小隊右向ニ＝廻レ」

三套

- 「小隊前へ＝進メ」
- 「小隊＝止レ」
- 「小隊後へ＝下レ」

四套

- 「斜ニ(左)右へ＝進メ」



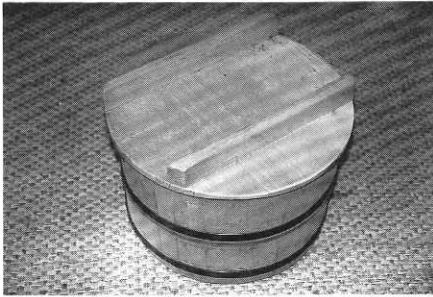
以下、このような教練の号令が、第二部の「小隊教練号令」まで続きます。

幕末、相模湾や伊豆半島沿岸には開国を求めて諸外国船が怒濤のごとくやってきました。伊豆の国の代官だった江川太郎左衛門は、国防の最先端の指揮者として、農兵を組織し、洋式の訓練を施します。訓練場には元の三島代官所だった「陣屋跡」(現在の三島市役所)が使われました。

「教練書」に、当時の代官や農兵たちの意気込みが「掛け声」になって聞こえるように思える資料です。

資料収集状況 (平成3年12月現在)

氏名	住所・電話番号	受入年月日	資料	点数
木村 重彦 氏	三島市東本町1-9-19	H3.5.6	「御家庭訓往来全」ほか古書、葉書	6
岩崎 聰 氏	三島市若松町4642-32	H3.5.17	下駄(ヒラッカ)	1
原 洋彦 氏	三島市東本町1-12-17	H3.6.1	フネ(ブリキ製冷蔵庫)	1
石井 勝雄 氏	三島市一番町13-33	H3.6.18	フネ(ブリキ製冷蔵庫大仁町で使用)	1
樋口 正智 氏	三島市南本町4-31	H3.7.13	オカモチ、湯タンポ(2)、重箱、孟子集註(3)	7
前田 健一 氏	三島市東本町2-6-27	H3.8.9	オヒツイレ、箱枕(2)	3
青木 義雄 氏	三島市若松町4385-14	H3.9.6	写真(3)、米穀類購入通帳(3)、抑留者会員名簿	7
緒明 実 氏	三島市一番町	H3.9.24	呑山画帳	1
野極 豊 氏	三島市富士見台7-5	H3.10.28	オヒツ(オハチ)	1



収集資料紹介

オヒツ

現在では、電気釜の普及で、釜から直接ご飯をよそって食べる習慣がふつうとなりましたが、以前はオヒツに一度移したご飯を食べたものです。オヒツのご飯は、具合よくご飯のべたつきが抜け、また木の香りがほのかにうつって独特の味わいがあったものです。

郷土館出版物紹介

■企画展図録「水と生活」

この図録は、企画展「水と生活展」にあわせ作成したもので、三島の川と水辺を中心に5つのテーマで構成されています。

第1に「古絵図に見る三島の川」と題し、三島宿街道絵図を掲載し、それに合わせ解説図を載せています。

第2に「水辺の生活・風景」と題し、市内の菰池、水泉園、楽寿園、桜川、御殿川、四ノ宮川、源兵衛川、宮さんの川、境川、大場川等の今昔の写真と解説を載せています。

第3に「水神の分布」と題し、水泉園、芝岡浅間神社、三嶋大社、^{三嶋大社}閻魔神社等の水神を写真と解説により紹介しています。

第4に「水と生活」と題し、水と信仰・水と伝説・祇園原用水・町の共同井戸を載せ、人々と水との関わりを紹介しています。

第5に「水(川)の生活と道具」と題し、川漁の道具、カワバタの道具、消火の道具、家庭の道具、酒器、職人の使う道具等を載せ、それぞれ写真にて様々な道具類を紹介しています。最後に「三島の水路図」と題し、市内の現在の水路図と水神の位置を載せています。

(1部1,200円。送料210円にて発売中)

■「三島宿本陣家史料集(7)」の刊行

内容は、樋口家文書の「毎日勘定帳」(天保十五年辰八月吉日)です。これは、本陣樋口家の日々の入用勘定が主体となっていて、本陣という特別な家柄の樋口家の勝手(台所)事情のわかる史料です。

現在郷土館受付にて販売しています。

(価格1,900円。送料260円。体裁B5判83頁)

本史料は数少ない江戸時代の家庭文書発掘による価値ある史料集です。又、原文とその解説文を見開き対照ページに掲載し、読んで頂きながら、古文書の解説練習ができるようになっています。それぞれの利用の仕方でお楽しみ頂ければ幸いです。



郷土館だより No.40

平成3年12月20日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
TEL 0559-71-8228
発行 三島市教育委員会